

組織病理カラーアトラス [Web 付録付] 第3版

坂本穆彦, 北川昌伸, 菅野 純(著)

横浜市大教授・分子病理学

藤井誠志

初学者が整理して理解しやすいように まとめた教科書

『組織病理カラーアトラス』は、病理学を学ぶ上で必要なことを初学者が整理して極めて理解しやすいようにまとめた教科書であり、著者らの長年のご経験と病理学に対する深い造詣が本書のような教科書のご執筆を可能にしたと感銘を受けている。医学を学ぶ学生にとって、興味を持てる内容であること、理解しやすい内容であること、学ぶべき内容が多すぎないこと、といった要素は賛否両論あると思うが、将来どの専門領域に進む医学生も診療面、研究面における病理学的重要性を学ぶ必要があることを鑑みると、重視されなければならないと感じる。

本書は総論と各論に分けて構成されることと合わせて、豊富な索引用語が巻末に用意され、総論と各論を行き来しながら読み返して内容を理解できるように配慮されている。病理診断学は分類学の一つであり、形態像を表現する病理学的用語の定義を正しく理解することは病理学を学ぶ上での出発点である。

例えば、肥大や萎縮といった総論で学ぶべき用語は、病因を意識したメカニズムによって分けられる用語であるものの、それらの形態像をひもづけて理解しなければ、知識と形態像が分離したままになり、病理学を学ぶ意義は薄れてしまい、最終的には馴染めない、ただの暗記が求められる学問として認識されてしまうことになる。本書はそれを避けるための十分な配慮がなされており、必要な言葉と簡潔でまとめた文章で解説がなされている。

実際の病理組織像を一人で学習する際には、どの組織像を認識すれば良いのかという問題にしばしば直面する。そういったことが想定される場合には、適宜イラストが併用され、医学生が直面し

がちな問題の解消を担っている。病理学は病気の理^{ことわり}を、形態学を武器にして探求する学問であることを首尾一貫して伝えており、常に病理形態像をイメージしながら、病理学の本質の理解を意識した構成と内容になっている。まさに“組織病理カラーアトラス”という名にふさわしい良質な教科書である。

各論については、各臓器についての疾患の紹介の前に、基本構造のチェックという項目が用意されており、正常とは異なる形態像の理解と病態の理解が円滑に理解できるように配慮されている。またどの臓器についても、極めてまれな疾患を含む分類上存在する疾患の全てをいきなり学ぼうとすると、病態の体系的な理解がおろそかになりがちになるが、それに対する配慮もなされており、まずは学ばなければならない必須の疾患が過不足なく選抜されて紹介されている。

ゲノム医療が推進される状況下では、病理医に求められることは増え、また病理学の位置づけも変わっていき、それに対応すべく病理学は日々発展、進化していかなければならない。病理学は形態診断学を武器とする学問であるが、それに加えて遺伝子異常が種々の程度で診断学にも組み入れられている。また分子病理診断の要素も求められ、治療病理学の側面も重視されてきている。本書はその基盤となる、変わることのない根本的な病理学全般の理解を十分に助け、読者を病理学の基礎から応用、発展へと導いてくれることが期待される。以上の理由から本書を推薦させていただく所存である。

●B5/頁434/2021 年
定価：本体12,000 円＋税
[ISBN978-4-260-04590-2]
医学書院 刊